



# 岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

NMDA拮抗薬、 $\alpha 2$ 作動薬による脳・脊髄微小血管反応のウィンドー法を用いた検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 宏樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/401">http://hdl.handle.net/20.500.12099/401</a>

## はしがき

脊髄が疼痛の認知・制御機構において重要であることが認識され、くも膜下腔に薬を投与することによって、脊髄に直接作用させて鎮痛作用を得ようとする試みは、オピオイドのみならず種々の薬でその有用性が確認されてきている。脊髄くも膜下腔に投与された $\alpha 2$  アゴニストは、脊髄後角の $\alpha 2$  受容体に直接作用することから、術後鎮痛はもとより、交感神経反射性疼痛やニューロパシックペイン等の難治性の疼痛に対しての使用の有用性が各種動物実験の結果や諸外国での臨床経験から注目を集めている。同様に NMDA 拮抗薬も各種条件下での脊髄の sensitization に基づく痛覚過敏状態やニューロパシックペイン、術後痛等に対する有効性が示唆されている。しかし、これらの薬物を spinal analgesics として使用する場合、脊髄や直接くも膜下腔を介して種々の機能の中枢である脳幹部に作用することによる影響は未だ十分に解明されているとはいいがたい。この実験モデルは、我々の施設で独自に開発したものであるが、生体顕微鏡下に脳・脊髄軟膜血管を *in vivo* の状態で直接観察する手技によって、NMDA 拮抗薬や $\alpha 2$  アゴニストが脊髄くも膜下腔に投与された場合の、血管反応性からみた脳・脊髄への作用・安全性を検討することを目的とする。現在、すでに臨床で充分使用されている血管収縮薬（フェニレフリン、エピネフリン）と比較することによって、脊髄局所での $\alpha 2$  アゴニストや NMDA 拮抗薬の安全性に関して、血流面から検討可能である。

今回の科学研究費、基盤研究 (C) (2) による「NMDA 拮抗薬、 $\alpha 2$  作動薬による脳・脊髄微小血管反応のウィンドー法を用いた検討」の研究成果報告書はこれらのことに基づいて、平成 9 年度から平成 11 年度の 3 年間にわたって行った成果である。

### 研究組織

研究代表者 飯田宏樹 (岐阜大学医学部・助教授)  
研究分担者 土肥修司 (岐阜大学医学部・教授)

### 研究経費

平成 9 年度	1400 千円
平成 10 年度	500 千円
平成 11 年度	400 千円

計 2300 千円